

大学生と 社会人の声

グローバル化・デジタル化の現状と 身に付けるべき力

グローバル化とデジタル化という社会環境の大きな変化を、大学はどのように捉えて教育を行っているのだろうか。そして今、企業の最前線で働く若者たちはその変化の中でどんな力を身に付けようとしているのか。大学生と社会人に聞いた。



「幅広く知識を吸収し、
自分の意見を伝えていきたい」

井上祥太さん



「日本の国力を上げるためには
日本の内側を見る視点も大切」

忠津亜依子さん

ケース1——国際教養大

授業での英語が 聞き取れないことに衝撃

全科目全て英語で行われる授業、1年間必修の海外留学、全新生入への寮生活義務付けなど、2004年の開学以来、グローバル人材育成のための大胆な教育を展開する国際教養大（A-IU）。実践的な英語力の

習得、就職率100%などの実績を上げ、注目を集めている。学生の入学時のTOEFLスコアは平均500点以上。高い英語力を持つ学生たちだが、それでも最初に感じるのは言葉の壁であるという。

忠津 入学後、最初に感じたのは英語力不足です。1年次は、全ての学生が大学での学びに必要な英語力を

付けるための「英語集中プログラム（EAP）」を受講しますが、その授業でさえ先生の言葉がほとんど聞き取れないのです。宿題範囲すら分かりませんでした。

井上 私も最初に感じたのは言葉の壁です。EAPの先生が来日したばかりのネイティブの方で、話すスピードがすごく速いんです。リスニング試験のように集中して聴かないと理解できず、最初は授業が終わるとぐったりするほど疲れました。

留学生との寮生活や1年間の海外留学は、学生たちが文化や国民性の違いの中で葛藤し、どのように折り合いを付けていくのかを考えさせられる試験の場である。

井上 3年次にチェコに留学した

時、同室のギリシャ人がガールフレンドを頻繁に部屋に招くようになりました。日本人であれば、「空気を読み、相手が嫌がることはしないと期待しますが、ここではきちんと言葉にしないと伝わらない」と思い、意を決して、やめてほしいと告げました。1度は彼も了承したのですが、後日、「ここは自分の部屋でもあり、自分もしたいことをする権利がある」と言われました。私は日本の常識で考え、自分の要求だけを相手に押し付けようとし、妥協点を探る努力が足りなかったと反省しました。その後、話し合っただけが彼女を招く時間を限定し、その時間は私は部屋を空けることで解決しました。

忠津 高校生の頃は、外国の文化を

受け入れるのは楽しく、簡単なことだろうと思っていました。ところが、留学先のモロッコで周囲の人たちとの文化の違いの大きさに戸惑い、自分は日本人なのだと思い知らされたのです。ただ、受け入れることが出来るものがあった時でも、「私は違うと思う」と伝えると、周囲は私の考えに耳を傾けてくれました。相



右・井上祥太（いのうえ・しょうた）さん 国際教養学部4年。静岡県立掛川西高校卒業。
左・忠津亜依子（ただつ・あいこ）さん 国際教養学部4年。徳島県立城東高校卒業。

手の考えとは異なることでも主張してよいと分かったことは大きな収穫でした。異文化コミュニケーションは、表面的に仲良く話をするのではなく、互いに受け入れられないものがあることを覚悟しながら、それでもあつれきを恐れずに自分を発信し、相手の言葉に耳を傾けることだと学びました。

世界に目を向けると同時に 地方への視線も忘れない

グローバル人材に求められる幅広い教養を身に付けるのも、同大学の目標である。海外の学生と接する中で、自分の知識の少なさに気付かされる学生は多い。

井上 留学先のチェコでは、現地で生活する人なら当たり前に知っているようなことが分からず、会話に付いていけないことが何度もありました。言葉は分かっても、流行など社会風俗全般に関する知識がないために、みんなが盛り上がりつつある話も肝心なところが理解できないのです。また、チェコの学生と捕鯨問題

について話をした時は、日本の鯨の捕獲数が分からず、相手の批判に反論できずに悔しい思いをし、高校時代から幅広いことに興味を持って、貪欲に知識を吸収しておくべきだったと感じました。今は社会問題や歴史問題など、気になったことはインターネットなどですぐに調べられるように心掛けています。ただし、それが日本語のサイトであれば思想的に偏った内容かどうかなどは、ある程

今後20年のグローバル化の進展に向けて 主体性の土台となる教養と語学力を

国際教養大
なかしまみねお
中嶋嶺雄学長

世界のグローバル化・IT革命は90年代初頭に始まり、世界は大きく変わりました。もはや後戻りできない流れであり、今後20年で、世界はさらに変わっていくでしょう。しかし、日本の多くの大学は閉鎖的で、そうした世界の情勢に十分な対応が出来ていません。

グローバル人材に求められる資質は、国際的なコミュニケーションツールとしての英語力に加え、クリティカルに物事を見る論理的な洞察力や主体的に判断できる力です。また、世界では、文化や文明、宗教の衝突によって混乱や悲劇が繰り返されており、異文化をきちんと理解できる素地も大切です。

24時間、365日開いている図書館に象徴されるように、本学の学生は一生懸命勉強します。大学生活や留学で鍛えられ一回りも二回りも大きくなり、個性的になると共に、幅広い教養を身に付ける大切さを実感します。また、異文化を理解するには、語学をきちんと学ぶことも欠かせません。本学では三言語主義を取っています。日々進歩するテクノロジーに流されないよう、人間としての主体性を身に付けることが重要であり、その土台になるのが教養なのです。高校時代は受験学力に偏らず、幅広い教養を身に付け、美術や音楽などにも触れて感性を豊かにすることを心掛けてほしいと思います。

度判断が付きませんが、英文サイトだとまだなかなか見抜けません。多くの情報を得るには英文サイトの読解は欠かせませんから、英語力と共に、世界の文化的な背景や価値観などの知識を吸収し、英文でも情報を判断する力を身に付けることが今後の課題です。

忠津 モロッコ留学の時、イスラム教に関する背景知識があれば、一歩も二歩も踏み込んだ体験が出来たと



EAPの授業の様子。設定時間内に英語で自分の伝えたいことを発言するなど、実践的な学びが展開される

思います。また、日本の歴史や宗教について聞かれた時に、十分に答えられなかったのもショックでした。高校時代に日本史を選択していたのである程度は答えられるのですが、「なぜ?」と聞き返されるとうまく説明できないのです。宗教について話す時も、私自身の宗教観になってしまい、日本人の宗教観が説明できませんでした。高校時代にもっとたくさん新聞や本を読み、日常のさまざまな事象について自分なりに考えてみる習慣を身に付けておくべきだったと感じました。

井上 留学中、イタリアで14人程

の学生と一緒にボランティアをした時、リーダーになる経験をしました。大学での2年間と留学での経験に加えて、自分がどう動けばよいのかを考え、指示を出せたからだと思えます。グローバル人材とは何かと問われれば、私は広くアンテナを張って、自分からいろいろな情報を探しに行き、その上で自分の意見をしっかりと伝える人だと思えます。文化や言語の違いは表面的なもので、大切なのは自分がどう考え、行動するかではないでしょうか。

忠津 私は新しいことをもっと知りたい、もっと学びたいと強く思います。昨日も深夜2時頃まで友人と勉強していましたが、大変とは思わず、自分が好きなことをしているという意識です。今の関心の1つは、日本の内側を見ることです。私は地方の出身で、日本の国力を上げるためには地方が取り残されてはいけないという思いが強くなります。だから、大学でも秋田県内の限界集落の調査に参加しました。私にとつてのグローバル化とは、外ばかりを見ることではなく、日本の内側への視点も大切にすることです。



「日本が持っている技術で世界に貢献していきたい」 久保田光騎さん

「相手を理解した上で自分の考えを伝える大切さを知った」 谷口茜さん

ケース2 立命館アジア太平洋大

国際学生との授業を経て 意見を伝える重要性を実感

「自由・平和」「アジア太平洋の未来創造」などを基本理念として2000年に開学した立命館アジア太平洋大(APU)。約80カ国からの2500人以上の国際学生(留学生)が全学生の約5割を占める多文化環境の中で、8割の科目を英語と日本語で開講する二言語教育を行う。多くの授業でディスカッションが設けられており、2カ月〜1年間の36カ国から選べる海外留学の機会もある。このような機会を通じて、国内学生(日本人学生)は自分の意見を明確に主張する姿勢を学んでいく。

谷口 国際学生と接して一番驚くのは、彼らが自分の意見をとても強く

主張することです。そのため私は、1・2年次は、国際学生がディスカッションを進めてくれると彼らに頼り切っていました。しかし、3年次に1年間、イギリスへの海外留学を経験してその姿勢を改めさせられました。海外では、相手の発言を遮って意見を述べる学生も多く、私は意見が言えないまま授業を終えることが何度もありました。これでは到底世界では通用しないと痛感し、帰国後3年生に復学してからは、ディスカッションの場で、相手の意見を理解した上で積極的に自分の意見を述べるようになりました。

久保田 日本では、きちんと講義を聞くのが良い学生というイメージがありますが、海外では、どれだけ自分の意見を伝えられるかが重視され

右・久保田光騎（くぼた・こうき）さん アジア太平洋マネジメント学部4年。福岡県立東筑高校卒業。
左・谷口茜（たにぐち・あかね）さん アジア太平洋マネジメント学部4年。立命館中学・高校卒業。



ます。APUでも、国際学生が多い授業ほど、国内学生から見ると授業らしくないものになります。学生同士が自分の考えを述べ合い、先生が説明している時でも疑問があればすぐに投げ掛ける。90分間ずっとディスカッションで、寝ている学生など1人もいません。しかも、ディスカッション中の国際学生の発言が、常に自身の経験や客観データに裏付けら

れていることに驚かされました。私の発言に対して「なぜ？」と聞かれた時に底の浅い答えしか返せず、悔しい思いをしたこともありました。

身近に感じたことに対して 行動を起こすのが私たちの務め

国際学生には政府から奨学金をもらい、国を背負って日本に学びにやって来る学生が多い。明確な使命感や目的意識を持った国際学生は、学びへの姿勢や志の高さで、国内学生に大きな刺激を与えている。

谷口 国際学生のモチベーションの高さにはいつも驚かされます。国際学生の多くが、卒業後は何らかの形で母国に貢献したいという気持ちで勉強に臨んでいます。そして、奨学金をもらっている限り勉強にはベストを尽くすといって、日常的に深夜まで勉強する人も大勢います。国際学生は試験で良い点数を取るためではなく、学んだ知識を社会で生かすために勉強しているのです。同じ講義を受けるにしても、将来のために学ぶという気持ちで臨むことで、学

何十カ国もの学生との学びを通じて 人間性と教養のある「地球市民」を育む

立命館アジア太平洋大 入学部長
こんどうゆういち
近藤祐一教授

今の大学生が30歳になる頃には、職場では多様な言語が飛び交い、プロジェクトは多国籍のチームで進められることが当たり前になっているでしょう。常にインターネットなどを通じて世界中とつながっている状態です。

本学が育てたいのは、ベースは日本にあるけれども、語学力やコミュニケーション能力、専門能力を駆使し、世界のどこでも仕事ができる、いわば「地球市民」として活躍できる人です。日本や日本語にこだわって世界で戦えません。

本学が特別である限り、日本の高等教育は変わらないと思います。大学は元々世界中から人が集い、学ぶ場所です。スーツケース1つで来て、多様な人の話を聞き、刺激を受ける。境遇や文化の異なる何十カ国もの人とかかわることで人間性や教養が育まれる、大学の本来の姿がAPUにはあります。

高校生は新しいことをどんどん吸収できる年代です。出来るだけ早くから視野を広げる機会があるとよいと思います。また、歴史や宗教、文学、芸術などの幅広い教養もグローバル人材には欠かせません。「なぜ教師になったのか」など先生自身の人生観や職業観をたくさん話していただくことで、多様な世界観や文化に触られます。そうした機会の積み重ねから、「自分はこれがしたい」という主体的な学びの姿勢が生まれてくると思います。

びの内容が格段に濃くなるのだということに気付かされました。

久保田 私は、韓国人の親友から受けた影響がとても大きかったです。彼は、将来は国のために働きたい、そのために学ぶという思いが明確にあり、成績は全部A+。半年で日本語も習得していました。彼に「何を指しているの」と問われ、自分も将来を真剣に考えるようになりました。就職先である商社について知っ

たのも、彼との会話からです。商社志望だった彼は、夢への近道を見付けたと、現在は政治家を目指しています。常に志を高く持ち、共に切磋琢磨できる彼は大切な存在です。

APUでは、何十カ国もの学生と友人になることも珍しくない。彼らとの交流を通じて、「当たり前が当たり前ではないこと」「日本について知識を深めること」の大切さを知ることになる。また、さまざまな国



ベトナム語の授業の様子。プレゼンテーションなどを通じて実践的に学ぶ。他にマレー語、インドネシア語など複数の言語の授業がある

の実状を知ること、これまでは異国の出来事だと思っていた事象も、身近に感じるようになったという。

谷口 学生寮では、ベトナム人と同室になりました。ある初夏の日、ゴキブリが部屋に出たのです。清潔にしていたので不思議でしたが、原因は彼女が床の上に常温保存していた野菜でした。ベトナムでは文化として野菜を常温保存します。それに対して怒るのはおかしいと思い、「ベトナムではそれが文化だと思いが、日本のこの時期には湿気があり、ゴキブリ発生の原因になる」と伝えた

ところ、日本の保存方法を受け入れてもらえました。他にも多くの文化の違いを乗り越える中で、肌の色、宗教、文化などで偏見を持つたり受け入れなかったりするのはなく、人を人として見て、その人の考えていることを理解し、その上で自分の考えを伝えることの大切さを感じています。これからも率先して行動に移していきたいことです。

久保田 国際学生とのかかわりを通じてもう一つ感じたのは、日本のことを学ぶ必要性です。「すら」と「さえ」の違いなどの言語の細かい点、「華道、剣道」などの「道」の由来など、国際学生の方がよく知っています。自分の国を知ることなしに、世界の中では自立できないと感じました。今では、分らないことがあるとすぐに調べるようにしています。

谷口 11年にタイで洪水が起こった時、たまたまタイ人の友人が帰国していて、現地の悲惨な状況を詳しく伝えてくれました。また、日本との間に領土問題を抱える国の学生の話を書く機会も多く、それぞれの国で語られている論調や認識の差に驚かされることも珍しくありません。日

本で流れているニュースをうのみにするのではなく、自ら情報を集め、判断する大切さを実感すると共に、世界の現実を自分のこととして考えられるようになり、将来はエネルギーや環境の問題に取り組みたいと考えるようになりました。

久保田 私は、将来、世界の国々に電所を造るような仕事をしたと考えています。APUには、インフラ



「簡単ではないからこそ
前向きな想像力で仕事を楽しむ」

榊島鉄平さん

ケース3 株式会社タカラトミー

海外相手の仕事では 逃げない気持ちが必要

大学時代、英語サークルに入っていたこともあり、海外での仕事には興味があった榊島さん。そのため、海外営業グループへの配属は素直にうれしかったという。

榊島 インドや中近東の国々に「ベイブレード(*)」を販売するのが

も満足に整っていない国から来る学生も大勢います。そうした国の実状を直接聞く中で、電気・ガス・水道に事欠かず、ネット環境も充実した日本が、いかに恵まれているかに気付きました。身近に感じられたことに対して行動を起こすのは、社会人になってからの自分たちの務めだと思いません。日本が持つ技術で世界に貢献していきたいと考えています。

私の仕事です。パッケージや説明書とその国の言葉で作直したり、販促イベントを開催したり、現地の代理店と市場調査を行ったり、業務は多岐に及びます。

ネイティブスピーカーではない人たちの英語は聞き取りづらいことも多く、苦勞することもありますが、ですから、後でトラブルにならないように、重要な話はメールで行って記

*1999年7月にタカラ(現タカラトミー)から発売された現代版のベーゴマ玩具。2008年からは『メタルファイト ベイブレード』として新シリーズが展開されている。

録に残すなどの工夫をしています。私自身、留学の経験もなく、語学力はまだまだですから、お互い様の配慮です。

今の部署で働いてみて、海外を相手にした仕事で必要なのは、英語力よりも逃げない気持ち、もう一度挑む心だと思いました。国内の仕事に比べると、その国の状況や取引先の思惑など、分からないことも多く、たくさん壁にぶち当たります。だから、自分をしっかり持って、「負けたくない」という気持ちでいないと仕事は続かないように思います。

ただ、英語力が重要ではないということでは決してありません。英語



樺島鉄平（かばしま・てつべい）さん 海外本部・海外営業グループ・海外営業チーム所属。法政大文学部卒。社会人歴3年目。

損得ではなく思い切って行動し そこから考えるたくましさも必要

株式会社タカラトミー
連結管理本部 連結人事部 採用教育課 主任
北坂 翠さん

国内玩具市場の横ばい状況が続く中、海外事業の拡大を図る当社ですが、語学力は採用段階における必須の要件とはしていません。当社の理念に共感できているか、広い視野を持っているか、自分で考えて判断できるか、そして、必要であれば上司に逆らってもやろうとする気概があるかを見ています。

英語が必要な部署に配属され、苦勞する社員もいますが、「何より重要な仕事の力をあなたは持っている」と伝え、意気高め、積極的に語学研修の場を活用するようになります。

海外での商習慣を原体験として理解できる人材も必要です。そのため、近年は外国籍の新卒社員の採用にも力を入れています。彼らに共通するのは、非常に行動力があり、目的意識を持った上でいろいろな経験をしている点です。アルバイトやボランティアなどの経験そのものが目的化し、「就職に有利なことは何か」という観点で経験を選択している学生と比較すると、成長度も違いますし、魅力的にも感じます。

仕事では無駄は結構大事です。無駄が面白い仕事につながることもあります。だから若い人たちには、興味を持った世界に思い切って飛び込んでほしい。失敗したくないとか、損か得かを考えていると行動できなくなってしまいます。行動しながら自分にとっての価値を考えるたくましさも必要です。

が出来ないことで、相手とのコミュニケーションがおっくうになり、仕事に対する姿勢も後ろ向きになってしまふことがあるからです。私は今でも外国人と話す時は緊張しますし、会うのがおっくうに感じる時もあります。でも、そうした気持ちを抑えつけ、自分を元気付け、なんとか頑張る。それが出来ると、仕事は面倒なものではなく、楽しいものになります。

情報を集めるほど 不安になることもある

「ヒット商品は、千に三つ」と言われるほど、玩具は売れ行きを読むのが難しい。まして、インドや中近東と日本では、文化が異なるため、国内での販売以上に徹底した調査が求められる。樺島さんたちは出張を重ね、更に現地の代理店と協力しながらマーケティングを行っている

が、思い通りにいかないこともあるという。

樺島 今何が売れているのか、メールでヒアリングするなど、地道に情報収集を重ね、現地に関する知識を得ようとしています。それは簡単なことではありません。例えば、私たちはパキスタンの市場調査も行っていますが、この国の玩具市場の情報などは、日本にはなかなか入ってきません。インターネットで調べてみると、英文のブログで「最近人気の商品」が取り上げられていることもあります。それが本当のことかどうかは分かりません。情報を集めることは大切ですが、集めるほど不安になってしまうこともあります。だから、本当は現地にとどまって、自分の目で全てを確かめたいのです。だが、現地に行っても分からないこと、理解できないこともある。それがグローバルな仕事の厳しさだ。

樺島 日本での商談ならありえない経験をしたこともあります。例えば、海外の取引先から突然注文をキャンセルする連絡が入ったため、「キャ

ンセルするなら材料費だけでも払ってほしい」と私が説明したのですが、いっこうに相手が受け入れようとしなかったことがあります。最後はけんかのような状態になりましたが、その原因が、会社にあったのか、その国の特性にあったのかは一概には言えません。

このケースでは1年後、相手と実際に対面する機会がありました。電話やメールではあれだけ紛糾していたのに、会って話すと対策を考えてくれていたことが分かり、次の話が出来たのです。面白いですね。本当に信頼できる相手かどうかは、ま

だ分かりませんが……。

タカラトミーでは、80以上の国や地域で「ベイベレード」を販売しているが、インドや中近東の売り上げは全体から見ればまだまだだ。

榎島 今は売り上げが少なくても、10年後には10倍になるはずだと信じています。仕事を楽しくするためには、不確実な中でも前向きに想像する力が大切です。玩具市場の成長は、国が豊かになることと密接に関連しています。売り上げだけでなく、その国が今後どう発展していくのかを想像することが、日々の仕事を楽しく進める活力になるのです。



「自分の意見を持つだけでなく、相手を受け入れる姿勢も必要」

箕輪こずえさん

ケース4 株式会社メトロール

憧れの実現のために海外へ 帰国後は貿易業務に従事

薬科大で分子細胞生物学を学んだという箕輪さん。海外とのかかわり

を深めた契機は、20代半ばで挑戦したニュージーランド留学だった。
箕輪 高校の先生が自分の海外での体験をよく話してくれたのですが、その影響で私も海外に憧れを抱くよ

うになりました。修士課程を修了し、体外診断薬(*)の会社に4年間勤めた後、夢を実現させるためにニュージーランドに渡りました。語学学校で英語を学び、修了後はバックパッカーズのゲストハウスで働きました。

4年半の海外生活では、文化の違いを感じるものがたくさんありました。日本では考えられないことです。嘘をついたり物を盗んだりすることが悪いという意識が低い人もいます。その点、日本人は嘘をつかず、またその仕事ぶりは真面目で丁寧だと評価が高いので、責任ある仕事を任されることも多くありました。

帰国後、海外で培った英語力を生かすために、貿易事務を募集していた精密機器メーカーのメトロールに応募しました。現在は、中国と台湾にある子会社やインドにある支店と、東京本社をつなぎ役をしています。支店や子会社の開設に必要な書類の準備、アジア圏の顧客からの注文や問い合わせへの回答、オンラインによる海外への送金やシステムの管理などを本社で担当しています。

仕事では、直接現地の顧客やコン



箕輪こずえ(みのわ・こずえ)さん 海外業務担当
東京薬科大学院修士課程を修了し、体外診断薬の会社に勤務後、メトロールへ。社会人歴10年目。

サルタントなどと連絡を取ったり、英語で書類を作成したりすることも。あるため、英語の力は欠かせない。だが、箕輪さんは言葉の壁以上に、文化の壁、意思疎通の難しさを感じるといふ。

箕輪 日本人相手なら、ある程度指示を出せば、後は言わずもがなで業務を進めてくれるところを、現地人スタッフは細部まで指示を出さないと動いてくれないことがあります。また、彼らは日本人にはない強い要求や自己主張をしてくることもあります。台湾の子会社の立ち上げの際、現地人スタッフを日本の本社に呼んで、仕事の流れを勉強してもらいました。製品が出来るまでの程度の時間が必要なのかといったこともき

*血液や尿便などを材料として、体内の異常や変化を検査する試薬の総称。

ちんと説明したのですが、いざ業務が始まると、本社が対応できないスピード納品を要求するのです。日本人なら恐縮してお願いしますというような場面なのに、当然のように主張するので驚きました。先方としては、本社の事情は知っているけれども、強く主張するべきところは主張するというスタンスだったのだと思います。そういう文化や商習慣の違いなどを踏まえながら、海外の事業所に本社の意向を伝え、理解してもらうことも私の仕事です。

ITの進歩により、世界中からオンラインで送金できるようになった。便利な半面、リスクも少なくな

箕輪 デジタル面でも、グローバル化の影響を感じます。海外への送金もかつては書面で行っていましたが、今は全てオンラインです。時間・コストの両面でメリットは大きいのですが、その半面、大変な部分も増えました。頻繁に管理上のパスワードを更新しなければならず、複数の口座を管理していると、パスワード

もそれだけ増えるため、管理が煩雑になるのです。パスワードをなくしてしまうと決済できなくなり、復旧まで大幅な時間のロスが発生して、取引先に迷惑をかけてしまいます。そのような事故を未然に防ぐためには、上司の指示を待つだけではなく、どのようなリスクがあるのかを常日頃から自分で意識し、疑問に感じたことはその都度周りの社員と相談しながら業務に当たることが大切です。

大切なのは相手を受け入れ その上で主張すること

グローバルな仕事を行う上で必要とされる力や心構えは、どのようなものだと箕輪さんは考えているのだろうか。

箕輪 もちろん、英語力は必須です。高校時代、私は英語の勉強が苦手でした。英語が大好きになったのは、ニュージーランドに留学してからです。現地の人々に触れる中で、この人たちともっと会話を楽しみたい、もっと理解したいと思うようになった

たのです。私にとって英語は、人と触れ合い、理解し合うためのツールにほかなりません。そして、英語力以上に大切なのは、コミュニケーション力です。ニュージーランドの語学学校では、英語があまり話せないフランス人が、上手にコミュニケーションを取っていました。また、ニュージーランドでは、小学生くらいの子どもでも自分の考えを持っていて、大人に対してもしっかりと自

英語もデジタルも それを使って何が出来るかが重要

株式会社メトロール 代表取締役
まつはしたくじ
松橋卓司さん

近年、業務の多くがデジタル化され、ルーチンワークは全て簡単に出来るようになりました。また、誰でも簡単に情報を入力できるようになり、情報をたくさん持っているということ自体には価値がなくなりました。これからはインターネットを使って答えを探す人ではなく、集めた情報を使って何をしたらよいのか、どういうものを作ったらよいのかということを考えられる人が重視されるはず。すなわち、さまざまな情報を概念化する力です。概念化するためには、個人としての生き様が必要です。それは正義感でもいいし、コンプレックスであってもいい。自分なりの価値観がなければ、創造性を発揮することは出来ません。

また、グローバルな社会では、アイデンティティーを確立しなければ相手にされません。人まねではなく、自信を持って自分の価値を提示できる人、正直、真面目といった日本人の美德を体現できる人が国際社会では尊敬されるのです。

そして、何よりも大切なのは、ミッション意識を持つことです。会社の目標や課題を自分のやりがいとして真正面から受け止める姿勢がなければ、いくら英語が話せても、コンピューターが使えても、組織の一員として活躍することは出来ません。英語もデジタルもツールの1つに過ぎず、それを使って何が出来るかということが重要なのです。

分の意見を話すことが出来ます。そうした様子を見て、自分の意見を持ち、それをしっかり相手に伝えようとする意志を持つことが、さまざまな人とコミュニケーションを取るためには不可欠なのだと思います。

箕輪 だが箕輪さんは、「自分を主張するその前に、大切なことがある」と言う。

箕輪 それは、相手の文化や考え方を受け入れようとする姿勢です。日

本人はよく発信力が弱いと言われますが、自己主張できたとしても、相手のことを知らなければ本当のコミュニケーションは成り立ちません。インドで支店を開くにしても、私たちがインドの人たちの生活スタイルや労働観を知らなければ、顧客からも現地スタッフからも受け入れ

られないでしょう。グローバル社会で大切なのは、自分たちの意見を主張するだけでなく、相手の文化や考え方を受け入れることです。その上で、こちらが主張すべきところは主張するというように、互いの接点や妥協点を見いだしていくことが必要だと思っています。



「仕事がしやすい人の要件は日本も海外も実は同じだ」

石丸秀行さん

ケース5 日本オラクル株式会社

何時間かかっても自分の仕事はやるしかない

世界を代表する情報・通信企業であるオラクル。その日本法人である日本オラクルは、代表的なグローバル企業の1つといえるだろう。IT産業という国際的に普及・進化する領域で働く石丸さんだが、入社当初は英語で大いに苦労したという。

石丸 入社後3年間は、出荷前の製品の品質保証を行う部門にいまし

た。外資系企業なので、海外とやりとりすることもあるだろうと思いついて、海外ドラマを字幕なしで見ると、内定後は地道に英語の勉強をしていたつもりでしたが、入社後は英語で随分苦労しました。

今でも鮮明に覚えているのですが、初めて英文で問い合わせのメールを作成した時、わずか3行くらいの英文を書くのに1時間もかかりました。英語でメールを書いた経験がないので、書き始めが「H」なのか、

「Hi, All」「Hi, Expert」なのか、そこから悩んでしまったのです。

また、新製品に関する5時間の説明映像を文書にまとめる仕事を任せられた時は、説明するインド人の英語がほとんど聞き取れず、絶望的な気持ちになりました。でも、この仕事を担当しているのは自分です。だから、やるしかないと思いました。先輩など、周囲の人たちの力を借りながら、期限内に自分が出れる精いっぱいのものでつくりました。

4年目からは現在の部署に異動。ここでの仕事は、出荷後の製品の不具合に対し、お客様の環境に応じた解決策を提供することだ。

石丸 日本以外にもアメリカ、インドなどに同様の仕事を行うセンターがあります。これは時差に左右されず、グループ全体で世界各国全てのお客様に対応できるようにするためです。したがって、業務の7、8割は英語を使ったものです。多くの問い合わせはメールで来ますが、緊急度が高くなると電話が直接掛かってきます。異動したばかりの頃は「掛かってこないでくれ！」と願っていたものです。

2年目になって、ここでの仕事にようやく慣れてきたところでした。今でも通勤時間などを使って英語の勉強をしています。入社時から比べると、英語力はそれなりに向上したと思います。やはり語学力は、使用する頻度と必要性によつて伸びが違ってきましたね。

大切なのは信頼関係をどうやって構築するか

英語のスキルが上がるほど、英語そのものはあくまでツールでしかなく、円滑なコミュニケーションのためには、もっと別の力が必要だと分かってきたと、石丸さんは語る。

石丸 外国人スタッフと円滑にコミュニケーションをするために必要



石丸秀行（いしまる・しゅうこう）さん テクノロジ製品事業統括本部技術本部。エンジニア。電気通信大学院修士課程修了。社会人歴5年目。

特集

環境変化に立ち向かう「主体性」を育む

なのは、相手の立場、理解度に合わせる力です。同じ専門用語でも、仕事をするチームによって微妙に解釈が異なることがあります。もしかして自分の理解とは違うのではないかと気遣うことが大切です。さまざまな国の人と話すことに慣れていないマネージャーなどは、話すスピードも含めて相手の理解に配慮したコミュニケーションをしてくれますが、現場のエンジニア同士は、自分の理解を前提にして話してしまうことがよくあります。私ももっと注意しなければいけないと思っています。

結局、大切なのは、お互いの信頼関係をどうやって構築するかということです。相手が日本人であろうが外国人であろうが、最後は仕事のしやすい人とそうではない人に分かります。その理由を突き詰めていくと、相手に配慮できるか、相手に何かしてもらった時はきちんとお礼を言えるか、そうしたことで決まってくるように思うのです。特に、私の仕事はメールや電話でのやりとりが中心なので、信頼関係の構築に一層努力

が必要なのかもしれません。

最近、インドに出張して、以前からメールなどを介して仕事をしてきた現地の人たちと2週間ほど一緒に働いたのですが、お互いの性格や仕事の仕方、職場環境などが分かるようになったことで、日本に帰ってから仕事がいやになりました。やはり、直接会うと信頼関係も築きやすいです。ただ現実には、グローバル化とデジタル化が進むほど、じかに対面することがないまま仕事をするケースも増えてくるでしょうね。

今後、エンジニアとしてのスキル、英語力を更に磨くと共に、相手の理解と思考を先読みする力を高めたいと石丸さんは考えている。

石丸 海外相手の仕事では、なるべく1度のメールのやりとりで終わらせることが大切です。何度もメールを往復させていると、時差のせいでも時間も返事がもらえなくなってしまう。だから、相手の反応を予想し、それに対するこちらの回答も分かりやすくメールに盛り込むような工夫が必要です。そうした、コミュニ

ケーション上の調整能力も向上させていきたいと思っています。グローバル化やデジタル化によって、「仕事」は更に難しいものになるだろう。では、困難に打ち勝つ素地は、どのような経験の中で培われると石丸さんは考えるのだろうか。

石丸 自分の判断で1つのことをやり抜く経験だと思います。高校生ならば、体育祭や文化祭などの行事でもいい。役割と責任を持って苦労した経験があれば、困難に直面しても「やるしかない」と逃げずに立ち向かえるはずです。

「学ぶプロセス」があって初めて人は
あいまいなもの、理不尽なものに向き合える

日本オラル株式会社 人事本部 シニアディレクター
宮之原 隆さん

ビジネスでのケースバイケースの対応力は、研修で身に付けられるものではありません。事前に教えられるのは、汎用的で原始的なものばかりですから、実際に働きながら必要な知識を身に付け、自分を適合させていくことになります。しかし、適合して学んだことは、インプットされたことよりも間違いなく強いのです。

高校や大学の学びで大切なことは、自分が突き詰めたいことに一心に取り組みながら、そこで試行錯誤を繰り返し、解決の手立てを講じていく「学ぶプロセス」を獲得することです。「学ぶプロセス」がある人は、新しい課題に出会っても、周囲の人を巻き込むなど、さまざまな手段を駆使して乗り切ることが出来ます。まだ見ぬもの、新しい価値観も吸収できるでしょう。仮に、英語力やITスキルが不十分であっても、仕事をしながらきつと身に付けられるはずで

社会環境が全く変化しないのであれば、昨日と同じことを繰り返してもうまくいくでしょう。しかし現実にはそんな企業は存続しえません。だから私たちも「学ぶプロセス」を持った人材を求めていますし、若い社員に対しては面談で自身の業務を振り返らせ、「学ぶプロセス」の存在に気付かせるように仕掛けています。

最近の若者は、具体的な指示があれば行動に移すことが出来ますが、指示のないあいまいなもの、自分の価値観に合わない理不尽なもの突きつけられると、途端に動けなくなってしまうとよく言われます。企業はもちろん、大学も、そして高校も、もっと若者に失敗を経験させて、その中で「学ぶプロセス」を体験させるべきではないでしょうか。最先端の技術をインプットすることに大きな価値はありません。それは明日には古いものになっているかもしれないからです。社会が変化しても生きてくるのは、本人の中に根付いた「学ぶプロセス」だと思います。